

## 池干しによるブラックバス駆除の原理原則

斉藤 憲治（水生生物保全協会）・三塚 牧夫（ナマズのがっこう、伊豆沼・内沼ドジョウ・ナマズ研究会）・藤本 泰文（宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）

斉藤は研究生活の半分以上を分子遺伝解析に費やしましたが、この分野を始めた 28 年前、細胞の無菌培養をされていた先生が、会うたびに口癖のように言っていたことを思い出します。

「斉藤君、細胞培養の世界には2つしかないんやで

無菌と、それ以外や

ほぼ無菌とかだいたい無菌とか、学生さんが言ってきたらもうあかんわ

逆に『完全』とかいう必要もない、無菌とそれ以外しかないんやから」

池干しによるブラックバス駆除の原理原則はこれと同じです。駆除と、それ以外、つまりゼロと、それ以外です。厳密に言うなら、雌雄そろっていなければ少数の捕り残しがあっても、寿命が来れば消えていきます。しかし、そんな器用なことができるぐらいなら、捕り尽くす方が簡単です。逆に雌雄そろった状態で、たとえごく少数であっても捕り残せば、次の年には捕食性の稚魚が出てきて、回復しようとする在来魚の稚魚を食害してしまい、数年後には元の本阿弥になるでしょう。

ブラックバスなど外来魚を駆除するための有効な方法として、あちこちで池干しが行われてきました。ため池ではこの方法は有効で、宮城県伊豆沼・内沼周辺では、三塚と藤本らの努力によって、駆除に成功したため池が多数あります。

池干しにはイベントとしての側面もあります。それまで目が向けられてこなかったため池の環境を見直したり、外来生物による被害の実態を知り、自然再生を体験してもらい、外来魚のいない環境を広げるための将来に向けての人的投資となります。

しかし、イベントが前面に出てしまうと、捕り残しがあるとわかっていて終了したり、あるいは捕り残しやすい状況（雨天など）で、日程変更なしに強行し、予想通り捕り残してしまったり、ということが起きがちです。イベントそのものが目的になると、同じ池で何度も、あるいはあちこちの池で漫然と不完全な池干しを繰り返し、結局は駆除に至らないことになりがちです。さらに、駆除に至らないイベントは、ほぼ駆除とかだいたい駆除でよいという、誤ったメッセージを参加者に届けます。再生した自然をお見せできないか、あるいは再び外来魚がはびこる状況をお見せしてしまうという点で、駆除をする池干しよりも、イベントとしての質が低いこととなります。

池干しは、地元との調整、水抜き状況の監視、水抜き中のブラックバス流下防止、当日の重労働と、かなりの時間をかけ、人員と資金を投入しての作業です。それだけ大変な作業なものですから、やり直す大変さを考えたら、そのとき、その場で、精いっぱい頑張ってやり切る方が、結局は楽ができ、安くつくこととなります。また、人員や資金に限りがある状況では、無駄遣いが多いとトータルとして駆除が進まないという面もあります。

ここでは、池干しによりブラックバスなどを駆除した例を紹介し、池干しと外来魚の駆除について考える場としたいと思います。